

『グレート・ギャツビー』

スコット・フィッツジェラルド 著 村上春樹 訳 中央公論新社 1100 円 (税込)

100年前のニューヨーク、ロングアイランド

会員 伊藤 祐介 (68 期)



舞台は第一次世界大戦後のアメリカ東部。本作は、贅沢で華やかな 1920 年代のニューヨークが描かれており、複数回映画化もされている往年の名作である。

一説によると、本作は発売当時、そこまで有名な作品ではなかったが、第二次世界大戦で従軍するアメリカ軍兵士のために本作のペーパーバックが大量に送られ、多数の従軍兵士からの人気で再評価に繋がったという見解もあるようである。

ことの真相は分からないが、少なくとも本作の内容自体は、全くハッピーなものではない。

本作の主人公はギャツビー、語り手はニックであり、ニックの視点で物語は進んでいく。恋愛小説ではあるが、アメリカ社会に対するシニカルな批評も多分に盛り込まれている。

ニックはアメリカ中西部出身で、代々続く資産家の息子である。第一次世界大戦の従軍経験（「時ならぬゲルマン民族大移動」と作中で表現されている）を経て、東部に移り住んでから、どこか居心地の悪さを抱えている青年として描かれている。

ギャツビーは裕福な家のお子ではなく、アメリカン・ドリームを追い求めている人間として、（少なくとも物質的にはアメリカン・ドリームを達成しているが、精神的にはまだ達成していない）描かれている。

その他の登場人物も、一見すると何不自由のない、恵まれた人々のように見えるが、みな何かを抱えている。ニックの大学時代の友人で、エール大学時代にはフットボールで全米に名を馳せたトムは、

「二十一歳にして限定された分野で突出した達成を

遂げ、そのおかげで、あとは何をやっても今ひとつ尻すぼみという、世間にありがちなタイプ」(18 頁)

とニックから評されているし、トムの妻のデージーは非常に華やかな存在でありつつも、どこか虚無感が漂っている。

物語の中で、このような登場人物たちが、毎晩のように上流階級や有名人たちの社交場に繰り出し、華やかなパーティーに興じ続けるのである。

私が本作を初めて読んだのは、20 歳の頃であった（そのときの訳者は村上春樹ではなかった）。その後、年を重ねる毎に違う訳者のものも含め、読み返している。内容の大筋は時間が経っても概ね忘れないが、読む時期によって、毎回違う印象を感じる。

例えば、前記引用した、ニックがトムに対して「今ひとつ尻すぼみ」と評している部分だが、20 歳の頃初めて読んだ時は、そもそもトムが 21 歳の若さで、全米で名を馳せるほどの活躍をしたことをすごいと思った。自分にはそのような大きなことができるのだろうか。

その後、何度か読み返した時は、トムのこれからの人生が「おまけ」みたいなものになっているとしたら気の毒だと思った。

今、40 歳近くになったが、あらためて読むと、「そういう話はもう良いじゃないか」とニックに言ってしまうようになる。自分の意識や言葉によって、自分の人生が作られることをより意識するようになってきたから。

あっという間に本稿の文字数の限界が迫ってきた。物語の核心部分にはあえて触れずに書いたので、気になった方は本作をご一読いただけたら幸甚である。